

この本と私

読むことで、気付くことと
書くことで、判ることがある

「人生の殻は何度でも脱げる」

藤本義一著

藤本義一さんの本を読んだのはこれで三冊目です。今回は、サブタイトルの「自分が面白くなる16の工夫」に惹かれて選びました。まず、旅編では、旅慣れた藤本さんの辛口の体験が書かれています。一例を挙げると、中南米では現地人と「明日会おうと」約束しても来ないそうです。これで怒ったらダメなんです。彼らは天気がよかったから、海へ行つたと平気で言うそうです。日本は管理社会だから約束を守るのは常識ですが、自然と共に生きている民族に、日本人の美徳を求めるべきではないと断言しています。食事にしても、ある地域では洗面器で顔を洗えば、それが食器にもなり、洗濯の器にもなる。それを不潔と思う日本人は潔癖症の文明病にかかっているといえます。バックツアーで流されるまま物見遊山するのは旅ではないとの考えには賛同できませんが、カルチャーショックを受けながらも現地の文化に慣れ親しむのは、多くの友人を得てきた藤本さんを見て本当の旅かもしれません。携帯電話嫌いだった話も面白い。もし、坂本龍馬が携帯電話を使っていたら明治維新を成功に導く薩長連合を成し遂げなかったと。龍馬は十分な時間考え、汗を流し、相対して話し合ったからこそ、人を動かしたとみています。携帯電話禍にしている現在、安易に走る傾向に警鐘を鳴らしています。このほか、マナーの心得が人間関係を円滑にすると、自身の女性との接し方、異業種間の仕事術にも触れ、人付き合いに自信が出てくる良書でした。

青春出版社

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株) ファッションビジネス・御堂筋新聞